

授業で使える作文素材 II-6

「あなたはそこにいなさい」(50分)

対象/中学生・高校生

1. プログラムの趣旨

震災発生前、自分の身近にも震災発生の可能性の高いことを意識していた。しかし、震災ではどういったことが起こるのか、どういう状況になるのか、どういう心情になるのかを意識して生活することはない。今、被災者の作文を読み、人々の状況や心情を理解し、家族や地域の人々のつながりを知り、普通の生活のありがたさを感じ取る。震災における、喜びと悲しみ、現実の厳しさを実感し、「自分だったら何ができるか」を考え、災害時、事後にできることを考え、次のステップにつながるきっかけとし、内面の成長を促す。

2. ねらい

震災を経験した生徒の作文「あなたはそこにいなさい」を読み、震災の状況を知ることによって、自分ができることを考える。

3. 展開

段階	学習内容	教師の支援・指導上の留意点
導入 (10分)	①「あなたはそこにいなさい」の作文を音読させる。 ②自分の印象に残ったこと、気になったところ、ひっかかるところをチェックさせる。	・作文の音読 ・作文にチェックを入れる。
展開 (35分)	席の近い6人のグループになる。 ③各自が印象に残ったこと、気になったこと、ひっかかったことについて、グループ内で発表させる。 ④それぞれの意見を交換する。内容について(印象に残ったこと、気になったこと、ひっかかったことの例) ・2011年3月11日について ・家族について(父母との再会) ・地域の人々について ・トランペットを吹こうと思ったのはなぜか ・瑠璃さんの現在 ・震災に教えられたこと ⑤私たちにできることは何か。 ⑥もし、あなたが瑠璃さんだったらどういうことが嬉しいと思うかを考えさせる。	・机を移動させ、グループ作り。 ・各自が一番印象に残ったことについて発表する。 ・グループの話し合い。 ・話を聞きながらプリントに記入する。 ・意見を交換し共有する。 ・意見や感想を述べ合う。 ・相手の意見を聞き、自分の考えを整理させる。 ・各自の考えを話し合い、互いの話を聞き、共感し違いに気づき、考えを深めるようにする。 ・被災者の立場になることの難しさを知る。
まとめ (5分)	⑦本時の振り返り。 ⑧今日学んだことをプリントに記入させる。	・振り返らせ、考え学んだことをまとめさせる。

作文：「あなたはそこにいなさい」 岩手県立大船渡高等学校(平成23年3月卒業)一佐々木 瑠璃一
出典：「祈り」東日本大震災の記録と手記一岩手県沿岸被災高校と支援学校一

東日本大震災当日三月十一日。

私は陸前高田市の隣町の大船渡市にある大船渡高校に通っており、その日は午前授業で午後は部活動でした。私は吹奏楽部に所属しており、トランペット担当でした。学校自体は新校舎なのですが、吹奏楽部の練習場所として利用させていただいていた、ちょっと古い研修会館という別館で、その日は練習していました。

練習中に、「そろそろ合奏の時間だから移動しようか」とメトロノームを止めに行ったときに、徐々に揺れ始め、すぐに収まるだろうと思っていたのにもかかわらず、揺れはどんどん強くなる一方で、天井にある換気扇が落ちてきたりふすまが外れて倒れてきたり、ついには天井まで落ちてきたり、生まれて初めて"死"というものを覚悟しました。

建物の外から先生の「出ておいでー！」という掛け声を耳にした瞬間、激しい揺れの中無我夢中で非常階段を駆け下り校庭に避難しました。"死"を初めて間近に感じた恐怖心からパニック状態で、校庭では震えながら泣いていました。そのとき携帯を開いたら、母からメールが入っていました。「大丈夫？落ち着いて。あなたはそこにいなさいね。」

このメールが母からの最後のメールになるなんて夢にも思いませんでした。

雪が降り始めました。校舎の中はごちゃごちゃ、第一体育館という大きいほうの体育館も照明が落下したり、窓ガラスが割れたりしたため使用不可。凍えながらしばらく校庭にいました。その間にも、家族が迎えに来て帰宅する生徒がたくさんいました。私は、メールをくれた母が迎えに来てくれると信じていました。校庭から大船渡の街を一望できるのですが、津波が来るのが見え、夢だ！信じたくない！という気持ちから、目をそむけてしまいました。その後しばらくしてから第二体育館のほうは使用できるということになり、建物の中に入ることができました。石油ストーブの周りに集まり、毛布一枚を友達と二人でひとつ、もしくは三人でひとつ使用していました。毛布が足りなかったためです。携帯は圏外で使用できず、家族と全く連絡が取れない中、夜が更けていきました。私はなぜ母が迎えに来てくれないのかが理解できなくて、そして母以外の家族もなぜ迎えに来てくれないのかわからなくて、でも、皆に何かあったのではないかということは不思議と頭に浮かびませんでした。無意識のうちにそんなことを考えるのを拒否していたのだろうと今では思います。

私が幼いころから、地震がきて津波注意報・警報が出るたびに、祖父が口癖のように「チリ地震津波の時も我が家までは来なかったから絶対我が家は大丈夫。それに、来たとしても石垣で周りの家より一メートルくらい高くなっているから来ても床下浸水で終わるくらいだろう。」と言っていたため、私はそれを鵜呑みにして、我が家まで来ることはないだろうと勝手に自分の家は大丈夫だと信じ込んでいました。

結局一睡もすることができずに夜が明け、避難してきた一般の方々に朝食を配り、自分達も食べました。携帯の電池を消費したくなくてワンセグを見るのを我慢していたのですが、どうしても今の状況が知りたくてワンセグを付けてニュースを見たとき、目を疑いました。気仙沼の燃え盛る町、大船渡の変わり果てた姿、陸前高田の様子はなかなか映らず、やきもきしていました。不安で、不安で、仕方なくて本当にとんでもないことが起こっているのだと改めて夢じゃないんだと思い知らされました。

陸前高田が映った瞬間、目を疑いました。そこにはあんなにきれいだった砂浜はどこにも見当たらず、あんなにたくさんあった松林もどこにもなく、道路のすぐ横が海という形になってしまっており、建物は全くない状態でした。瓦礫の山しか見えず、『こんなの高田じゃない。そんなはずはない。』と思いました。そのような映像を見てしまったため、我が家は本当に大丈夫なのだろうかという不安が生まれてしまいました。

昼過ぎにやっと親戚が迎えに来てくれました。なぜ母じゃないのか、ほかの家族は？家は？聞きたいことは山ほどありましたが、「まず、落ち着いてからね」と濁されて、母の

実家の本家に連れていかれました。母の実家は海から三メートルほどしか離れていない場所にあったのですが、本家についたときに目を疑いました。母の実家は跡形もなく、母の地元である大船渡市末崎町は瓦礫だらけでした。『本当にとんでもない震災なのだ。』とびくびくしながら、本家に足を踏み入れ「ただいま…」と言いました。誰もいないようでした。しかし、ちょっとしてからよろよろと壁伝いに歩いてくる人が玄関へやって来ました。包帯を左目と頭にぐるぐる巻き、なぜか高田高校の野球部のジャージとベンチコートを着た父だったのです。父に抱きついて大泣きしました。『家はダメだったのだな…、父だけが怪我をしてここにいるということは、祖父母は…。』涙が止まりませんでした。でも、母がいないことだけは全く理解できませんでした。「お母さんは…？」と父に聞きました。すると「お母さんの行方は分からない。」と言われ、父が生きていたという天国と母と祖父母がいないという地獄をいっぺんに見せられた気分でした。

その夜からしばらく寝ることができず、電気もガスも水道もない中、精神的にも肉体的にもつらい生活を強いられました。四、五日くらいたったでしょうか。陸前高田へ帰る足もなく、一度も帰っていなかった私たちは、ガソリンの調達も思うようにいかないにもかかわらず親切に貸していただいた車で、震災後初めて陸前高田に行くことができました。

車で行くことができたのは途中までで、陸前高田の変わり果てた姿に言葉を失い、息をするのも忘れるとはこういうことかと思うほどの衝撃を受けました。大好きだったあの町並みは、見る影もありませんでした。

山の上にあった給食センターが、臨時の市役所のようになっていました。そこで行方不明者の申請や、死亡者のリスト等を見ることができました。そこへ向かう途中で、親友"まい"の兄が包帯を頭と腕に巻いて、自転車で坂を下ってきたので、「まいは…、まいは無事なんですか…？」と聞いたときの兄の顔は今でも忘れられません。「一緒に逃げているときに波にのまれて、繋いでいた手が離れちゃって、俺だけ何とか助かって、まいは…。」親友まで私は失ってしまったのだろうか、絶望に打ちひしがれました。

臨時の市役所に到着した後も、知っている人ばかりの名前がある行方不明者リストは本当に見ているのがつらくて吐き気を覚えるほどでした。その場所で、偶然出会った父の知り合いから、母の財布がわたされました。隣町の瓦礫の中から発見されたということでした。ものすごい量の瓦礫の中から、個人の財布が見つかり、しかも、それを知り合いが所持していたということは、本当に奇跡で、泣くほどありがたかったです。と、同時に、やっぱり母はダメかもしれない…というぬぐいきれない不安がありました。

家の跡地に向かうと、そこには瓦礫しかなく、大好きだった大きな立派な桜の木は根こそぎなくなっていました。跡地から数百メートル先に我が家の二階部分がかろうじて形を保った状態で流されていたのを発見しました。中を見てみると、いろいろな瓦礫が侵入してはいたものの、思い出の品が何とか引っ張り出せそうな状態でした。その日はもう暗くなってきたので、また明日取りに来ようということにして高田を後にし、本家へ戻りました。

次の日、思い出の品を取りにまた高田へ向かいました。引っ張り出している最中、父と祖母と叔母が避難したという我が家の二階の廊下部分はずぶれていたのですが、廊下側にわたしと弟の靴を置いていたことを思い出し、靴であれば洗えば履けるかもしれないと思い、屋根の壊れた部分から屋根裏に侵入し、天井を壊していました。すると父も私のことを心配して、同じ作業をしてくれました。

「るり、いったん天井破るの、やめろ。」父がいきなり私にこう言いました。「え…、どうしたの…？」ただならぬ父の雰囲気不安を覚えました。

「…足がある——。」

周辺で行方不明者を捜索していた消防団の方を呼び、屋根を完全に壊してもらおうと、中から、祖母と叔母の遺体が発見されました。二人の死に顔は言い表せないような苦しそう

な顔でした…。父ももしかしたらこうなっていたのかもしれない…。そう考えるだけでめまいを覚えました。父も祖母と叔母と同じ場所に逃げ、かろうじて助かったのですから…。

叔母には私と同じ年の娘がいました。その子に叔母が見つかったことを教えに行きました。「るりのお母さん、安置所にいたよ。」その子に言われました。ここで、希望はすべて打ち砕かれました。

母がいるという安置所に向かいました。もう、薄暗くなっているところで、安置所である小学校の体育館に入っても、あまり周りにはよく見えませんでした。ある一つのブルーシートの塊の前まで案内されました。ブルーシートに包まれた"それ"の脇には、震災一か月ほど前に母と二人で撮ったプリクラが大きく張られた、母の携帯がありました。信じたくありませんでした。ブルーシートがめくられました。—————…母でした。

頬にあざがあったものの、その顔はいつもの寝顔のようで、泣き叫びながら、起きてよ、起きてよ、と、何度も言った覚えがあります。

その晩は、本家に戻って、親類皆に報告し、皆で泣きました。三月二十九日に母と祖母の火葬を執り行いました。

母に私が死に化粧を施しました。ずっと涙が止まりませんでした。

いざ、火入れされる時も、いやだあ、お母さん、と、ずっと泣き叫んでいました。

母が灰になっていくと思うだけで、立っていられませんでした。

骨壺に収まるほど小さくなってしまった母をずっと私が抱いて帰りました。

町は何にも変わらなくて、祖父が見つからず、安置所めぐりをしながら、長いようで短い一か月がたったころ、家の跡地で、祖父母に小学校四年生の時に買ってもらったトランペットを吹こう、吹奏楽でホルンをやっていた母に励まされながら続けてきたトランペットを吹こう、そう思い、中学校の頃演奏したことがあった「負けないで」を吹くことにしました。自分に言い聞かせるように。皆も負けないように。

そこで、偶然音色を聞いてやってきた朝日新聞の記者の方と、TBSの方と出会ったのでした。

新聞とTVにでたとき、ものすごい反響で、こんなに大事になるとは本当に考えてもみなかったのが、驚きととまどいでいっぱいでした。

そしてある日、難民を助ける会の柳瀬房子様から、東京オペラシティホールで行われるチャリティーコンサートに出演してみませんかというお手紙をいただくことになったのです。

正直、散々迷いました。

私は母と祖父母と家をなくしたが、父と弟、そして母方の祖父母がいる。しかし、両親を亡くした子、家族全員亡くし自分一人になってしまった人、自分よりもつらい状況にいる方はたくさんいるのに、自分だけこういう思いをしてもいいのだろうか。

しかし、父はそんな私の背中をやさしく押してくれました。

「お前が、そのことを伝えるに行けばいいじゃないか。」と。そしてわたしは、コンサートに参加することを決めました。被災地の状況を伝えるために。

震災直後は、皆、毎日を必死に暮らしているという感じでしたが、現在はまあ、ある程度の余裕は感じられますが、それは、やっと人並みの生活ができるようになっただけであって、金銭的にも精神的にも、まだまだきつい生活を強いられているのが被災地の現状です。復興に向かって皆頑張って前を向いて生活していますが、さまざまな葛藤の中で生きています。

私は現在福島県立医科大学看護学部にも所属しております。部活動は水泳部（プレーヤー）、陸上部（マネージャー）、軽音楽部（ベース、ボーカル）にも所属しており、毎日楽しく充実した生活を送ることができています。

しかし、まだまだ震災の傷は癒えておらず、整理がついていないため、心理の授業で安

置所の話、津波の映像等がながされたときに、授業を抜け出して一人でトイレで泣いたりということは多々ありました。独り暮らしのため、震災のことを思い出してしまっても誰もそばにいないということもあり苦しむことも多いです。しかし、理解してくれる友達がたくさんでき、支えてくれる先輩がいるので、うまく頼りながら生活しております。

現在の町の様子は、瓦礫がすっかり寄せられ、すっきりとしてしまいました。大きな建物は中身ががらんどうで、あの日のまま時間が止まっているかのようにそびえたっており、かつて町があった場所には雑草が生え、町中緑色です。陸前高田は五メートルかさ上げするのですが、その作業が始まろうとしていました。むなしくて、悔しいという感情しかわかりません。

この東日本大震災を経て、わたしはつらい経験をしたとともに、多くのことを教えられました。まず、この世に、"当たり前"は存在しないということです。電気があって、ガスがあって、水道があって、食料があって、これはすべて当たり前ではないのだとー。すべて大切に使うなければいけないということが、改めて実感できました。

また、経験しなければわからない、ということです。

東日本大震災を経験するまでは、片親がいない人の気持ちや、阪神淡路大震災を経験した方の気持ちなんてわからなかったし、考えたこともありませんでした。しかし、どちらも経験してみてわかりました。経験できたことは幸せだとは絶対に思えないし思いませんが、より多くの人々の気持ちを理解することができるようになった点では、"私"という人間を形成していくうえで、私の人生に大きな影響を及ぼしてくれることであろうと思っています。同情はいらないのです。ただ、わからないならわからないなりに応援する方法は、いくらでもあると思うのです。この体験談が少しでもこれからの日本の役に立てればと思います。